

かわら版 育種の波動

全国新品種育成者の会発行

活発な質疑が飛び交う

育種オンラインセミナーを開催

春から延期されていた2020年度の講演会が、10月29日育種オンラインセミナーとして開催されました。

講演では、酪農学園大学教授の園田高広氏から、雌雄異株でF1育種の難しいアスパラガスの効率的な育種法による新品種育成について紹介されました。島根県の農業技術センター主任研究員の加古哲也氏からは、県育成のアジサイについて、農業技術センター、アジサイ研究会、市場等が協力して、消費者が支払う価格に見合った優良品の販売を目指す島根県アジサイプロジェクトの取り組みが紹介されました。

更に、農林水産省知的財産課の藤田種苗室長から、国会で継続審議となっている種苗法改正案について、農林水産・食品産業技術振興協会(JATAFF)の永田部長から、植物品種等海外流失防止対策コンソーシアムと令和2年度の実施事業が説明されました。

初めてオンラインによるセミナーには、非会員を含む30名程の参加を得て、各講師との活発な質疑応答が行われました。

わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話し言葉で作成しています

誰もがやらない交配に挑戦して 新色のクリビアを作出

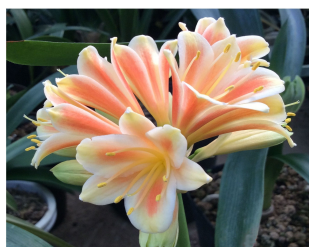
佐々木成孝さん：私は会員ですが、農家ではありません。埼玉県越谷市で妻がやっている介護の仕事を手伝いながら、クリビア(君子蘭)を育成・販売している佐々木成孝です。25年位前に、斑入りダルマ君子蘭を見て「鷲が羽を広げているようでカッコいい」と植物に初めて興味を覚え、斑入りクリビアの収集を始めました。1997年に34歳で交配を始め、2000年に世界のクリビアマニアが花の品種改良に熱く取り組んでいることを知って、育種にのめり込んでしまいました。当時、私は第一園芸のトラックドライバーをしていて、クリビアの収集と育種は趣味で行っていたんです。植物については、第一園芸の優秀なスタッフ3人から

園芸の基礎を学び、千葉県の君子蘭の園主の経験などから育種を学びました。

次第に増えるコレクション・交配苗で自宅(東京都調布市)は手狭となり、千葉県にある温室を借りました。そんな中、腰を据えてクリビアに取り組もうと考え始め、2004年から海外向けにオリジナル交配種子をネット販売していて収益もそれなりであったことから、2007年44歳でドライバーを辞めて、本格的にクリビアビジネスを始めたのです。



私がクリビアの育種でめざしたのは、黄花、オレンジ花以外の八重咲きの各色の作出、実生2年で開花し年2回咲く系統の固定、葉芸では黒赤軸で葉裏も濃い赤のトリカラーリーフ系統の立葉品種を確立するなどです。2006年以降、南アフリカ原産のアガパンサス、クリビアの近縁種であるハエマンサス、そして最近ではアマリリス(ヒッペアストラム)の交配も行っています。アガパンサスでは、自家交配でできた底緑の花の系統とバイカラーをミックスした新花色と芳香花の育成、ハエマンサスでは葉の斑入り葉品種等の改良をめざしています。それらの新しい植物はまだ改良途中で、販売できるものは完成していません。まだ量産体制はできていませんが、クリビアの育種については、23年が経ち、緑花、オレンジとクリームのバイカラー、ピーチ、ブラッシュピンク、赤黒花等、種間交雑種を含めて花色のバリエーションを徐々に広げることができました。日本で普及しているミニアータ種(受け咲き)は主に朱赤色ですが、南アフリカにある朱赤に弁先が緑色の筒状花の5種類の原種を交配に使い、新色を生むことができました。花卉先端が白く縁どられたピコティ花の「オラー」、玉虫色のブロン



オラー



アガミス ブラック

ズの「ファンタビュラス」、赤黒花の「アガミス ブラック」も、海外から高い評価を得ました。

私は2002年、2006年、2010年の3回南アフリカに行き、国際クリビア会議に参加・講演したことで、多く

の国の愛好家、ナーセリーの代表と会い、各国のクリビア状況を把握し、南アフリカ等のブリーダーがやらない交配を行って種子販売に努めてきました。現在の販売先は、海外が8割、日本は2割程度です。海外に愛好家が多く、まずはネットのクリビアコミュニティ(南アフリカとオーストラリア)に参加し、メールで写真を公開すると、種子や株が欲しいと多数の注文が来るようになりました。英語は単語を並べるだけの様な内容ですが、翻訳ソフトも使って対応しました。10年前、海外へのクリビアの種子の販売、株の輸出は日本で私一人だけだったので、注文が殺到したのです。2008年～2018年にはジャパンクリビアツアーを主催し、海外6カ国から買い付けに来た参加者の輸出手続きの面倒も見ました。

今の主な販売先は、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカのクリビアナーセリーと愛好家への種子と株の輸出版売と国内の君子蘭マニアへのネット販売です。20年ほど前、中国と日本を除いた他の国では「葉より花」でした。南アフリカでは「ピーチ」が大人気で価格も約6万円と高額で、愛好家も高くても買えないと嘆いていて、リッチマンのコレクションでした。「錦鯉よりクリビアだ」と、日本に八重咲や斑入り葉のダルマを買いに来る人もいました。日本では、今もって葉芸のダルマが人気のトップですが、最近では私の紹介する新しい花色のものに興味を持つ流れも広がりつつあります。やはり愛好家は、どの国でも、若い人は少ないようです。海外への普及方法は、「信頼できる海外の友人を一人でも良いからつくる」ことだと思います。英語ができなくても思いを伝えれば、わかってくれる人はいるんです。その人の力を借りれば、世界の最新事情を知ったり、自分の育種がどの程度の位置にあるかを認識することができるんですね。

オリジナリティーとは、それまでと明らかに違う個性だと思っています。ビートルズのメンバーのポール・マッカートニーは自身の音楽を「バディホリーの曲の模倣から始めて新たなコード(和声)を付け加えた」と話しているように、模倣+新しい要素がオリジナリティ(独自性、新規性)を誕生させる一つの方法と解釈しています。私は、ある植物で過去に誰かが作出したも



のや興味深い交配を探しての考察(=模倣)、新しいが、近縁や他の植物では得られている表現形だが、

育種対象植物では発現していないということで「新しい」(=新しい要素)を考えながらオリジナリティーある花を育成しようと取り組んでいます。そして、作り出した花に何度見ても見飽きないオリジナリティーがあるかが、私にとっての美意識の分かれ目です。近年では、当会の佐藤顧問に私の作った花に対して新たな角度から育種していく具体的な手法をアドバイスしていただき、新たな刺激となりました。

私の育種する植物は、日本にも世界にも有名なブリーダーがゴマンといて、しのぎを削ってる世界で販売されています。その中で、注目される品種を作り出したいと日々奮闘していますが、突破口は、誰も成功していない「交配アイディア」を生み、それを実行させて苗を作り、美しい花を咲かせるのが私の目標です。

商社の営業マンから花の商売に転身

◎仙波勉さん： 栃木県真岡市の仙波勉です。私の両親は花の栽培をしていましたが、息子の私は大学の経済学部に入り、卒業後は商社の営業マンとなって輸入した電子機器を販売していました。会社で物や金の流れを勉強させていただくうちに、自分で0から作り上げたもので商売がしたいと思うようになり、2003年に24歳で就農しました。

就農するに当たり、農学校で学んだり、植物を栽培したこともないので、愛知県の早川園芸で研修を受けました。研修中は早川園芸の敷地内で寮に入り、土づくり、ハウスの補修、施肥や除草といった農業をする上での基本となる作業を教わりました。

私の農園での栽培しているのは、両親から引き継いだプリムラ・マラコイデス、ラッセル・ルピナス、桔梗と私が始めたアジサイです。オリジナル品種を持てば、こちらで価格を決めることができ経営の安定にもなると思い、25歳からプリムラ・マラコイデスとルピナスの育種を始めました。ですが、就農したばかりで、収益面よりも変わった花を作ることの楽しみの方が大きかったと思います。育種といっても、当時の私は赤い花と白い花をかけ合わせればピンクになるだろうといった程度の知識でやみくもに交配をしていた状態でした。

時を同じくして、15年ほど前に、うちの農園に育成者の会の顧問の佐藤和規さんがひょっこり訪ねてきて、「仙波農園のオリジナル品種が備えている遺伝資源と自分が作った品種が持つ遺伝資源を組み合わせ、全く新しいプリムラ・マラコイデスの共同育種をしませんか」と持ち掛けてこられたのです。佐藤さんは父に声をかけられたのですが、就農したばかりの私が共同育種を行うことになったのです。佐藤さんから、育種について、どういう表現の個体を作りたいかという明確な目標を立て、それを得るためにはどん

な親株を選べばよいか、その親株をどう管理すべきか等を教えていただきました。また、私の地元の若手生産者に対し、勉強会を月に一度10年以上に渡り行っていたいただき、様々な植物に関することを幅広く教えて下さり、ありがたく思っています。

育種を始めたプリムラ・マラコイデスとラッセル・ルピナスは、どちらも、作りやすくロス減につながるような耐病性、耐暑性、耐寒性が強く、バラエティのある花色のものを育種目標としました。毎月来てくれる佐藤さんの助言を受けながら、プリムラでは、今までのマラコイデスにはない優しい色合いと、節間が少し長く揺れる容姿で、花もちの良いウインティー・シリーズを開発し、2015年にウインティー・サクラ、2017年にウインティー・ピーチの登録を受け、さらに2品種を出願中



ウインティーシリーズ4色

です。ラッセル・ルピナスでは、品種「ミナレット」を素材として10年以上を費やして矮化剤の不要な極矮性の系統と花芽分化や開花に春化处理の必要がない通年開花の系統をそれぞれ育成し、いずれの系統もラッセル・ルピナスが備える色彩の全てを表現できるように仕上げたので、花きではほとんど例のない特許を米国と日本で取ることができました。

ウインティー・シリーズは、大手園芸会社のS社に苗の生産販売を許諾し、全国のホームセンターや専門店で販売されています。自分の製品は5~6号の鉢花に育て、花もちの良さを強調できるよう30本の花穂を満開にし、さらに多くの新しい花穂が立ち上がってくる状態で出荷しています。通常のマラコイデスより2~3倍の価格で売れている状況です。また、育成したラッセル・ルピナスは、佐藤さんと共に共同育成者であるアメリカの苗会社GFB社が2016年から販売し、爆発的な人気商品となっています。この新しいラッセル・ルピナスは、ヨーロッパでも今秋から販売が開始されました。サラリーマン時代に海外の生産品を販売していたことから、花でも海外展開したいと思っていましたが、佐藤さんにその目標を叶えていただきました。夢をみさせていただいていると思っています。

これまでの育種作業で、できる限りの交雑を試みていますが、年に1度しかチャレンジできないことはもどかしささえ思えます。でも、だからこそ貴重な交配期間に慎重に作業することを心がけています。ともかく、

行動を起こせば、必ず何かを得られるのが育種だと感じています。数年ごとに新品种を発表し続けられればいいことはありませんが、夢を見すぎですね(笑)。コツコツとやり続けることを基本として、今後も努力していこうと思っています。

輸入品種にないバラの育種に挑む

西日本豪雨で2農場を消失するも

好きな育種に取り組む

❗**今井清:** 瀬戸内海に面する広島県呉市で、バラの育種をしている今井ナーセリーの今井清です。私は、今年70歳の古希を迎えました。昭和44年に18歳で就農し、病気が多く難しそうなバラの栽培を始めました。

育種をするようになったのは、当時切り花が多く輸入されていたので、自分がオリジナル品種を作って海外品種との差別化を図ろうと思ったからです。平成5年43歳でした。私は、当時大手種苗会社から委託されて苗の生産をしていたおかげで、ヨーロッパの種苗会社に見学に行くことが度々ありました。そこでの育種の様子を見て、言われているより品種はたやすく作れるのではないかと感じたことが、自分もやってみようと思ったきっかけです。平成5年、43歳でした。育種に関する知識は、日本ばら切り花協会の会報を見て学びました。

目標としたのは、耐病性、多収性、これまでになかった花型と花色、低温下での生産性、香りの強さです。当初の5年間は、母親とするよう品種が見つからず、気に入った品種は創れませんでした。苗の生産をしていたことから毎年種苗会社から新しい品種の試作を頼まれていたので、その試作品種の中から期待する親が見つけられたのがラッキーでした。育種の一番の問題点は、梅雨時に湿度の高さで種腐れを起こすことでしたが、ヒートポンプを使用してエコモード運転することで除湿が可能になり、育種の精度を飛躍的に向上させることができました。そうして取り組んだ結果、2004年の5品種を皮切りに、カップ咲き品種、香りの強い品種、スプレー咲き品種等、これまでに約60品種を登録することができたんです。そのような特性を持つ品種を作ったのは、差別化を図ろうと輸入するバラにはない品種で差別化を図ろうと取り組んだからです。利用者のニーズにこたえることは大切ですが、流行の変化が速いので、私はそれを気にせずオリジナリティを追求してきました。育種には時間がかかります。流行を追っても、思うようにはいきません。自分の思う理想のバラをめざして育種しています。

品種が持っている最高の形質の組み合わせを見つければ、育種だと思います。それが見つかるまでは、

チャレンジするしかありません。育成者にとって最高の喜びとは、作り出した花を世界で最初に見られることです。

世に受け入れられたオリジナル品種を生み出せたおかげで、有利販売ができています。販売する品種は、全国で行われる品種説明会に出向してPRするとともに、ホームページにも紹介しています。今井ナーセリーとしての切り花の出荷と共に、切り花生産者に苗の販売を行い、パテント代の回収や品種の権利自体を販売しています。近年は、ガーデンローズにも力を入れ、種苗会社3社とタイアップして趣味家に販売しています。さらに、花の輸入商社を窓口にして海外展開にも取り組み、コロンビア、アメリカ、ケニヤ、エチオピア、ベトナムの5カ国で試作を行い、コロンビア、アメリカ、ケニヤでは、「モンシュシュ」、「ライセンス」等の7品種で約10万本の本格切り花生産に入ってもらっています。海外進出するには、信用できるところを窓口にすることが必要だと思っています。



今井ナーセリーは、2018年7月の西日本豪雨で3か所あった農場のうち、倉橋農場(1000坪)と広農場(800坪)の2か所が被災し、生産中止に追い込まれる壊滅的な被害を受けました。倉橋農場は1週間に渡って不通となった道路と電気が回復した後、半年間回復に向けて努力しましたが、結局1本のバラも出荷できませんでした。この豪雨で、私の育成品種は10品種程が消失しました。48歳の息子の満が農場の代表で後を継いでくれている(一時コチョウランの育種をしていました)ので、息子に任せて育種だけを楽しもうと思っていましたが、そうもいなくなってしまうようになりました。現在は、比較的被害の軽かった1550坪ある野呂山農場で育種に力を入れ、何とか経営を継続しています。私の育成品種は人気があり、他のことをするよりは育種に力を入れた方が生き延びられるのではないかと思ったからです。

今年はコロナウィルスにより、経営は大変な痛手を受けています。広島県で盛んなキクも大きな打撃を受けているようです。結婚式やイベントなどの中止が相次いでいますから。私の作った品種も結婚式に特化したような表現ですので、今年は苗の注文が全く無いんですが、ここへきて数件品種説明会を行うことになったので、期待しているところです。しかし、コロナの蔓延は、航空機の不就航も重なって海外のバラ

業界にも大きな打撃を与えているので、今年はコロンビア、アメリカ、ケニヤでも、生産が増えることはなさそうです。

西日本豪雨で被害を受けてから、我が家は悪いことばかりにあっていますが、私は育種のおかげでここまでやって来られたんですから、これからも育種に頑張ろうと思っています。やはり、自分は育種が好きですからね。今後も、主幹となる赤かピンクの品種、病気に強く薬剤をあまり使わなくてよい品種、仕事の効率が上がって健康に良い香りを持つ品種の育成を目標として、頑張っていこうと思っています。

東京農試で果樹育種に35年

92歳の今も育種に励む

🍷 芦川孝三郎さん：多摩川に近い東京の調布市に住む芦川孝三郎です。私は、1948年に東京農工大学を卒業し、大学の付属農場で勤務して3年後に23歳で東京都農業試験場(現東京都農林総合研究センター)の研究者となり、果樹の育種を行ってきました。当時の本業は、栽培技術の研究で、育種をするなどと思っていませんでした。時間がかかるし、やるもんじゃないと思っていたんです。当時は、国(農林水産省)でたくさんの品種が育成されましたが、私はそれと在来種との親和性を調べるために、在来種と交配を行っていました。そこで得られた種を播いたら面白い結果が出たので、小規模に交配を始めたことで育種が私の本業になってしまったんです。

育種を始めるに当たっては、各地の研修者や篤農家の先輩を訪ねて勉強してもらいました。ブドウでは、「巨峰」を育成した静岡県伊豆山の大井上理農学研究所の大井上康所長と、「ピオーネ」を育成した静岡県の井川秀雄氏を訪ね、ウメでは南高ウメを開発した和歌山県田辺市の南部高校の竹中勝太郎氏を訪ねました。

試験場時代の育種では、ブドウでは種無しで大粒品種、ナシとカキ(甘ガキ)は早生の優良品種の育成が目標でした。ブドウでは「巨峰」の粒付きの悪い欠点を改良しようと、「巨峰」の実生120本ほどを養成し、そこから選抜した系統の中からほとんど種のない1本を発見し、「高尾」の名で1975年に品種登録を



高尾

受けました。農水省に検定してもらったところ、「巨

田田田田 伝言板 田田田田

🌸 今号でも、4人の会員の育種の取り組みを紹介しました。92歳の芦川さんは、当会最高齢の会員ですが、今でも育種に取り組まれ、この記事の作成にも喜んで協力くださいました。今後も、各地で頑張っておられる皆さんの取り組みを紹介しますので、掲載する際にはご協力をお願いします。

🌸 育種オンラインセミナーに参加された皆様、ありがとうございました。オンラインでは初めての実施で、参加者がうまく参加できるか、聞き取りにくかったりしないか等を心配しましたが、ITに強い会長や役員、参加者の皆さんのおかげで素晴らしいセミナーができたと思っています。

🌸 4人の講師が説明に使った資料及び動画は、会員は自由に見ていいと承諾を得ましたので、ホームページ内の会員ページに掲載することにします。会員ページに関するパスワード等は整い次第、後日ご案内させていただきます。「全国新品種育成者の会」で検索。また、紙で欲しい場合は、事務局岩澤にご連絡してください。

🌸 当新聞第3号で紹介した種苗法改正案についての各界の皆さんと対談して意見を聞いた内容を「種苗法改正について考えよう」のタイトルで発信している林副会長のYouTube作品、既に6回まで完成していますので、各対談相手をお知らせします。

第1回 農林水産省知的財産課種苗室長

藤田裕一

第2回 元農林水産大臣

山田正彦

第3回 伝統野菜の販売者

高橋一也

第4回 食と農の問題のフリー研究家

印鑰智哉

第5回 東大大学院生

岸本華果

第6回 全国農協青年組織会副会長

岡山フルーツ農園

高原弘雅

林副会長は、「今後も対談相手を選んで、新たな作品を発信します」と語っています。

🌸 今年度総会の日程等については、近く役員会で決定次第お伝えします。

このかわら版についての意見、情報提供、感想、問合せ先は。次のとおりです。

全国新品種育成者の会事務局

岩澤 弘道

090-4059-1096

Fax 03-3691-2818

Eメール iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com